

書燈

2019年 No. 53



図書館と私



生源寺 眞一
食農学類長

図書館には本当にお世話になりました。とくに最初の勤務先の図書館が鮮明に思い起こされます。農林省農事試験場という古風な名称の研究機関で、埼玉県鴻巣市の水田地帯にありました。ここに昭和51年から56年まで勤めていたのですが、その図書館、というよりも、小さな図書室が私にとって大切な思い出の場所なのです。

研究機関に勤務と書きましたが、大学の農学部を卒業後ただちに就職しましたので、いわば修士の学生と似たポジションにあったわけです。今になって振り返れば、学問的な素養は貧弱そのもので、それを見かねた先輩がとにかく勉強する環境を整えてくれたのです。そのひとつが図書室での文献との出会いのガイドでした。

古い建物の二階にあった薄暗い図書室で、専門の農業経済学に関係する古典的な文献を手にしたときの気持ちは忘れられません。当時は有り余るほど時間がありましたので、じっくり読むこともできました。エンゲルの『ベルギー労働者家族の生活費』やチャヤノフの『小農経済の原理』などが頭に浮かびます。

お世話になったと言えば、公立の図書館も忘れることができません。30代後半の私にとって、勤務先から逃げ出す安息のスペースが都内の区立図書館だったのです。昭和から平成に時代が変わるころのことで、学会の雑務を担当していたこともあって、研究室には予定外の案件が次から次へと飛び込んできたのです。仕事が頻繁に中

断されるのが嫌でしたので、周囲には内緒で脱出したわけでした。たとえば小石川図書館には何十回もお世話になりました。

安息のスペースと申しましたが、休息になるだけでなく、むしろ学術的な資料を集中して読むこともできました。いくつか論文の原稿を仕上げたことも記憶しています。パソコンが普及していない当時のことですから、原稿の作成は基本的に手書きでした。したがって、区立の図書館の読書空間が絶好の仕事場になったわけです。

私自身の図書館での体験はいささか特異なパターンだったかもしれませんが、図書館とのつながりのタイミングや形態には、人それぞれに個性があるだろうと思います。学んでいる専門分野によっても違いがあるはずです。新たに開設された食農学類の場合も、4つの専門コースのベースとなる学問は異なっています。生物学、化学、物理学、生命科学といった分野であれば、早くから図書館とのつながりが必要になるでしょう。電子ジャーナルからのダウンロードも必須になりそうです。一方、人文社会科学の分野であれば、農文協から貴重な書籍の寄贈もありますから、学部時代から古典に親しむことができるはずです。

空間としての図書館の利用についても、各人がトライしてみるとよいと思います。福大の図書館の特徴のひとつは豊かなスペースです。そこに交流の場としての温かい雰囲気もあります。さらに、じっくり精神を集中する空間としても活用できます。私も実際に資料の読み込みに使ってみました。快適なひとときでした。

拙文の冒頭、図書館にはお世話になりましたと過去形で始めましたが、利用者として、これからもよろしくとお願い申し上げる次第です。

*** 農山漁村文化協会（農文協）からの寄贈図書の受け入れについて ***

食農学類開設準備及び震災復興支援の目的で、2015年11月の施設移転に伴い閉館した農山漁村文化協会（農文協）図書館より、蔵書をご寄贈いただくこととなりました。附属図書館においては、2018年度より本格的に一般図書の受入作業を進めています。食農学類の関係者だけでなく、本学のみならず、また、地域の方々にもご利用いただける資料となっていますので、ぜひご活用ください。

● 資料の特徴

- ・農文協図書館の蔵書（一般図書）の多くが、農と食と環境に特化したものであり、新設の食農学類のみならず、他の学類においても有用な資料と考えられる。
- ・『日本農書全集』の底本（コピー製本）約300冊が、今後、閲覧可能となる予定。

● 受入状況（令和元年8月末日現在）

- ・受入数：図書11,811冊、雑誌数十冊
※原則重複資料を除き、選定の上、受入資料を決定
- ・資産額：30,329,404円
- ・分野ごとの受入冊数（図書のみ）
※分野は、日本十進分類法の類目による

分野	<000> 総記	<100> 哲学	<200> 歴史	<300> 社会科学	<400> 自然科学
冊数	41	11	383	831	1,261
分野	<500> 技術	<600> 産業	<700> 芸術	<800> 言語	<900> 文学
冊数	954	8,184	87	8	48

特に産業分野において大幅な蔵書の拡充が見られる。

- ・配架状況：受入済の図書等は、開架閲覧室及び書庫等に配架
※受入済資料は、蔵書検索システム（<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/opac/>）にも反映されており、学内外の方にご利用いただけます。

● 寄贈図書と配架の様子



ダンボール約1,000箱分を受入作業中



開架閲覧室等に配架

*** 食農学類開設関連展示の報告 ***

1. 福島大学附属図書館における展示

平成31年4月3日(水)～令和元年5月8日(水)

食農学類の開設に合わせ、新入生や学内の皆様に食農学類における研究内容などを紹介するため、食農学類教員の著作展示コーナーを新館2Fに設置しました。著者本人より寄贈された図書62冊を展示し、新入生ガイダンスでの案内を行うなど、多くの方に見ていただくことができました。

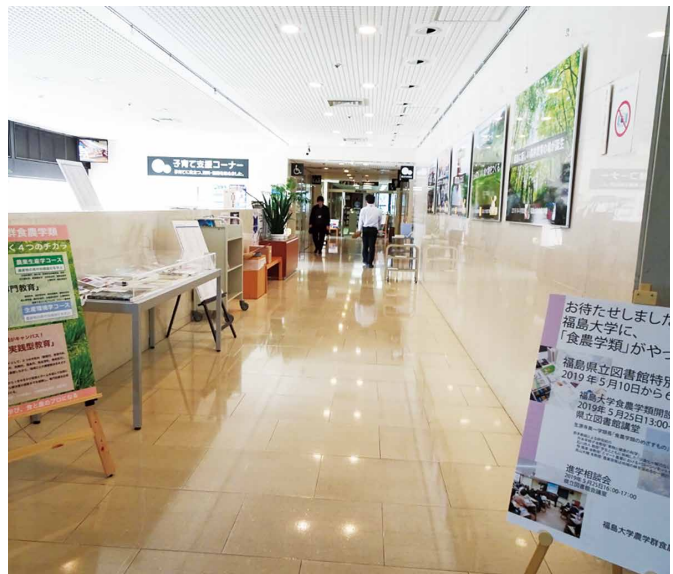


2. 福島県立図書館における展示

令和元年5月10日(金)～6月5日(水)

福島県立図書館のロビー「展示コーナー」において、食農学類のパネル展示及び教員の著作紹介の展示を行いました。ここでは、著作リストの他、福島県立図書館で所蔵している資料も展示していただき、社会科学から、農学、理学、環境学まで広がる食農学類教員による研究成果を学外の多くの方に知っていただく機会となりました。

また、5月25日(土)には、「食農学類のめざすもの」と題して、福島県立図書館の講堂にて、生源寺眞一食農学類長と若手研究者による講演会を開催し、100名ほどの来場者がありました。



3. 市内書店(西沢書店)における 教員著作コーナーの開設

令和元年5月25日(土)～6月16日(日)

上記の福島県立図書館における展示及び講演会に合わせ、福島市内の西沢書店大町店において、食農学類の教員著作を集めた特設コーナーを設置していただきました。87冊の著作リストも配布し、出版社に在庫があれば取り寄せ可能ということで、広く食農学類を地域の方々にも紹介することができました。



理念と目標の改訂について

附属図書館「理念と目標」策定ワーキンググループ座長 鈴木 めぐみ

福島大学附属図書館の活動の指針となる「理念と目標」は、2007年に策定されたものである。この間、大学を取り巻く環境も大きく変わり、大学図書館に求められる役割や機能も変革を余儀なくされている。2016年には、国立大学図書館協会が「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて（ビジョン2020）」を策定し、その実現に向けて、各図書館が様々な取り組みを行っている。本学についていえば、特に、2011年の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の発生に伴い様々な影響を受けるとともに、それに対処する様々な活動を展開しており、また、図書館の建物が建て替えられ、施設の利用形態も大きく変化した。このような情勢の変化と、前回の作成からすでに10年を超えていることに鑑み、「理念と目標」の改訂を行うこととなった。

2018年6月の第59回附属図書館運営委員会で改訂の検討を行うことが決定され、同年12月に各学類及び新設学類の代表1名から構成されるWGが設置され、図書館職員と密に連携を取りながら、検討を重ねた。検討の結果、「理念」については見直しの必要はなく、また、目標については、現行の第3期中期目標・計画「中井プラン」が2021年度末までのものであることから、第4期中期目標・計画期間に入る2022年に向けて、暫定的に見直すこととし、引き続き次期に向けての検討を次年度から開始するものとした。目標の改訂に関しては、まず、2007年以降の活動状況を精査し、今後の課題を洗い出した。その上で、情報媒体の変化、学生へどのようなサービスを提供するか、地域との関係をどのようにさらに発展させていくか、震災やそれに関わる活動をどのように後世に伝え、支援していか、学内の各種資料の管理のあり方など、図書館の今後のあり方を議論し、さらに、それをどのように目標の文言に結晶化させるか議論を重ねた。その結果が図書館運営委員会で審議されたのちに役員会に報告され、一部修正を経たのち確定した。それが下記の「理念と目標」である。

福島大学附属図書館の理念と目標（附属図書館運営委員会決定（2019.3.29））

■ 理念

福島大学附属図書館は、学術情報基盤を支える図書館として学術情報・資料、学術研究の成果等を広く集積し、快適な利用環境のもとで提供する。蓄積された知的情報資源を活用することにより、地域社会との連携と協力をさらに深めつつ、国内外からのニーズへも対応することを重視しながら、文理融合型の学術研究・教育活動の進展と自律的な学習活動への支援による人材育成に寄与することを使命とする。

■ 目標

- (1) 学生の自律的な学習活動と研究者の研究活動を支援するため、資料（図書・雑誌等）や電子的リソース（電子ジャーナルやデータベース等）の整備充実を図る。
- (2) 学術情報基盤として教育研究活動を支援するため、ラーニングコモンズをはじめとする施設の整備活用を推進する。
- (3) 利用者の知識や情報の発見可能性を高めるため、学術情報の有効活用と職員等の支援能力の向上を図る。
- (4) 研究成果の集積・発信により情報公開の推進と社会に対する説明責任を大学として果たすため、研究成果や学習教材等の電子的流通とオープン化を推進する。
- (5) 開かれた大学図書館として地域の生涯学習活動を支援するため、地域社会との連携を図る。
- (6) 東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故を後世に伝え、それに関する教育研究や地域貢献活動の更なる充実を図るため、関係資料を広く収集整理して公開する。

図書館に寄贈されたブロンズ像『峰』について 人間発達文化学類 新井 浩

本学創立70周年を記念して福島テレビ株式会社様よりご寄贈いただいた、本学附属図書館ロビー設置の「峰」について、せっかくの機会ですのでその概略と設置の意義について記そうと思います。

『峰』は梁川町出身の太田良平氏が制作し、昭和45年(1970)年に日展に出品した作品です。太田良平氏は昭和の初めから平成まで、文部省主催の文展時代から法人化後の日展を中心に活躍した作家で、福島県の歴史の中でも屈指の彫刻家として挙げられます。県庁正面玄関前の巨大な母子像『平和の像』の作者である、といえは多くの方が納得される彫刻家です。また附属図書館の隣に並ぶ『素足の修道女』、本学信陵公園の『鎮魂・わだつみ像』も太田良平氏によって制作された作品です。

これらの像はどのような思いや願いで作られたのでしょうか。

『平和の像』では親子の姿に託して「平和への願い」、「家族の大切さ」、「未来に向かう姿勢」などが表されているようです。『素足の修道女』では清楚な女性の姿で「人の願い・祈り」が、『鎮魂・わだつみ像』では時代の大風にあおられて顔を

背けざるを得なかった「無念・悔しさ」が表されています。

『峰』は半裸の男性像に託して、峻険、清明な峰々を表した像です。外側に広がる人の姿で峰々の雄大さを、簡素に肉付けされた頭部や胴体で澄み渡った清らかな峰の様子が表されています。

彫像にはそれがどんな形状で表されているかという外形だけでなく、内側に託された思いがあります。その内包される思いまで読み取ろうとしてこそ、作品理解への第一歩となります。

時代はこの先AI時代の到来が予想されています。そんな時代でも芸術が表す「創造性」や「良さ」に向かう価値、多様な表現があることを認めあえる姿勢といったものは人間だけにできることで、これをどう機能させていくかはこの先ますます大切になります。

この像を通して、様々なことを学生が感じ、考え、大いに成長していく姿を期待したいと思います。



令和元年5月29日には、福島テレビの方々もお招きし、ブロンズ像『峰』の寄贈式を行いました。

今野源八郎旧蔵書について —闘う交通経済学者コンパチ先生と生家移築計画—

道路文化研究所理事(株)ネクスコ・エンジニアリング東北顧問 阿部 公一

「今野源八郎」、なんと峻厳な響きをもったお名前だろう。日本の交通経済学に大きな足跡を残したこの大先生を、福島大学図書館のスタッフは「コンパチ」と呼ぶ。聞いて、にんまりしてしまった。

最近、東北の高速道路計画の経緯をレビューしようと、「今野源八郎文庫」を利用させていただき、先生の著書・関連資料に触れる機会を得た。

先生は、経済成長に合わせて予想された高速道路・航空を主体とする交通形態への変革を積極的に提言し、ときには歯に衣着せぬ主張をなされた。特に高速道路計画については、山地・奥地開発を目的とした国土開発超重点主義や、「表日本」と「裏日本」との利害を調整すべく脊梁山脈寄りに配置した路線計画を強く批判した。

例えば、『地域学研究』(日本地域学会、昭和47年3巻)に掲載された報文「東北開発と交通政策」には、仙台市街地西側の山地部を通過した東北自動車道に対する痛烈な批判を見ることが出来る。

また東大教授を退官して弘前大学に移られてからは、弘前

市を迂回するかのように津軽平野東側の山寄りに配置された東北自動車道計画に異議を唱え、路線変更運動を指導された。

交通機能を軽視し農牧地開発重点主義に過ぎた高速道路計画を批判した先生の生家(相馬市坪田字上原田)の敷地の一部が常磐自動車道の建設用地にかかった。

それが誘因となったわけではないだろうが、平成16年(2004)、農業と養蚕業で栄えた豪農建築(明治中期、かぶと造りである先生の生家)を、米国マサチューセッツ州のシズタニ日本伝統工芸学校ほかに寄贈する計画がもち上がった。

日本古民家保存協会をはじめ多くの関係者のご努力により、移築先の高校生との交流等を経て、平成19年には解体して、米国に搬出しようと相馬港近くの倉庫に保管していたが、東日本大震災の津波によって流失してしまい、計画は実現しなかった。

一方、交通機能を重視する方向に舵を切った日本の高速道路計画。その方向転換に大きな役割を果たしたコンパチ先生の蔵書はここに「今野源八郎文庫」として残り、日本の交通政策史を語る証人として生き続けている。

学内教員著作寄贈図書



〈男性同性愛者〉の社会史：アイデンティティの受容/クローゼットへの解放

前川直哉著
作品社，2017.4

367.9
Ma27d

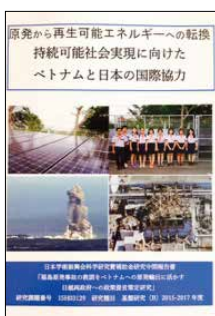
資料ID：118015004

日本に「同性愛」という概念がもたらされてから、約100年。性的マイノリティの人権をめぐるのは、未だに多くの課題も存在します。本書は1920年代から70年代の日本において、同性に対して性的な欲望を持つ男性たちが、「男

性同性愛者」というアイデンティティを受容していった過程について検証するものです。歴史の検証は、現在の課題を考える上でも大きなヒントをもたらしてくれます。

大正時代の雑誌で「男性同性愛者」たちは、「周囲に打ち明けられない」と悩み、「相手探し」や結婚をめぐる苦悩について吐露しています。彼らの多くは同性愛の「治療」ではなく、自ら「同性愛者」というアイデンティティを引き受けることで、こうした直面する苦悩の解決を図りました。そこでは、「男性である」というジェンダーの特権が無自覚に利用される場面もありました。史料の海に潜り、私にとっても発見の連続だった歴史の旅路、ぜひおつき合いいただければ幸いです。

(教育推進機構/前川直哉)



持続可能社会実現に向けたベトナムと日本の国際協力：原発から再生可能エネルギーへの転換

研究代表者 坂本 恵
科研費中間報告書
(課題番号：15H03129)，
2017.3

543.5
Sa32j

資料ID：118052837

本書は、科研費研究「福島原発事故の教訓をベトナム原発輸出に活かす日越両政府への政策提言策定研究」(基盤研究B 研究代表坂本恵)の研究成果をまとめた報告書である。ベトナムは2009年に日本、ロシアからの原発導入

を決め、最終的に14基の原発を建設する予定であった。科研費研究では、福島原発事故の被害の深刻さ、安全管理の難しさ、建設コストが及ぼす経済的負担などについて、福島大学研究者を中心に専門家の助言も得て状況をベトナムに伝える努力を行ってきた。その結果、2016年10月のベトナム国会において、すべての原発導入を撤回すると議決が行われ、ベトナムを含む東南アジアには原発が存在しない状況が維持されることになった。本書は韓国、台湾の原発の状況もあわせて分析し、ベトナムを含めた東アジア地域での再生可能エネルギー導入の現状と課題を論じている。最新の研究動向を得る一冊といえる。

(行政政策学類/坂本 恵)



鐘の音が響くカフェで

ポール・ヴァッカ著；
田村奈保子訳
春風社，2018.8

953
V12k

資料ID：118020322

国語の成績が芳しくない中学生の少年が、ブルーストを偶然知ったことで、町の人たちを巻き込んで『失われた時を求めて』のお芝居を企画する。それは、彼が愛する文学好きの母を力づけるための催しだった…。『失われた時を求めて』を換骨奪胎させた、作者の文学への愛に裏づけられた作品ですが、堅苦しさはなく、少年時代

の学校での悩み、友情、淡い初恋、家族で過ごす日々の描写に、誰もが懐かしさや共感を覚える物語です。少年一家には抗いがたい運命が襲うのですが、それを乗り越える力をくれたのは、他でもない自らが生きた過去の記憶でした(ブルーストという「無意志的記憶」の作用です)。特別でない日々の中にあつた幸せな思い出に、私たちは思いがけなく支えられるものなのかもしれません。少年の境遇に胸が締めつけられますが、最後の場面ではあたたかい涙がこみあげてくることなのでしょう。読み終えた直後、家族で過ごした浜辺のシーンに戻ってみたいくなるはずです。中高生から大人の方まで、幅広い年代の方にお読みいただきたい小説です。

(行政政策学類/田村奈保子)

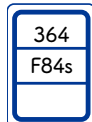
著作資料のご寄贈のお願い

先生方からご寄贈いただいた資料は、新館2Fの「福島大学教員著作物コーナー」等に配架され、本学の貴重な資料として永く保存し、広く学生や地域の方にもご利用いただいております。著作物のご寄贈について、ご協力をお願いいたします。



社会保障：社会保障制度 社会保障サービス (第6版)

福祉臨床シリーズ編集委員会編；
熊沢 透 [ほか著]
弘文堂，2019.2



資料ID: 118052864

労災補償は学生アルバイトにも適用されます。より正確には学生アルバイトを雇用するほとんどすべての事業に適用されます。アルバイト先で労災に遭ったら医療機関では持っている健康保険証を使わずに、「労災です」ということ。これはどんな学類の何年生に対するどんな科目であって

も、僕が必ず最初の時期に話すことです。たぶん多くの学生が知らなくて、多くの学生が今日明日にも関わる可能性のあることだからです。

詳しくはこの本で僕が担当している第6章を読んでみてください。全編にわたって社会保障の各論について学べます。制度についてのテキストなので、改訂を重ねてきました。現時点での最新の制度改編に対応しています。自分の身を守るためにも、たくさんの読者に恵まれないと思いません。

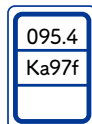
社会福祉士国家試験で過去に出題された労働保険に関する設問はかなり検討したので、僕の章を読んで正答できない設問は過去10年以上ありません。ささやかな自負ですけれども。

(経済経営学類/熊沢 透)



福島の除染と復興

川崎興太著
丸善出版，2018.8



資料ID: 118039870

わが国の政府は、東日本大震災と福島原発事故の発生直後に、2020年度までの10年間で復興を果たすとの方針を示しました。すでに8年半が経過していますが、本書は、私がこの間に進めてきた福島復興に関する研究の中間とりまとめであり、大きく、次の2つのことを明らかにしています。

1つは、除染。除染は、福島の復興の起点かつ基盤として実施されてきましたが、2018年3月で終了になりました。本書では、この除染の実態と課題を考察し、除染の終了は、

放射能汚染問題がすべて解消したことを意味するものではないことを明らかにしています。もう1つは、避難指示の解除。除染の終了に伴って、双葉町と大熊町以外の市町村では、帰還困難区域を除いて、2017年4月までに避難指示が解除されました。本書では、避難指示解除地域の実態と課題を考察し、「避難指示の解除は復興に向けたスタートライン」と言えるほど、原子力災害は生易しいものではないことを明らかにしています。本書では、こうした除染と避難指示解除地域の実態と課題を踏まえて、最後に、“2020年問題”を指摘しています。

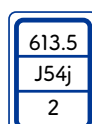
福島の復興は、2020年度までに実現できないことは明白です。本書を読んで、2021年度以降の長期にわたる福島の復興のあり方を考える上での参考にしていただければ幸いです。

(共生システム理工学類/川崎興太)



土壌生態学

金子信博編
朝倉書店，2018.8



資料ID: 118025778

土壌生物というと微生物のことを思うかも知れません。土壌に棲む生物は微生物以外にも皆小さいので、あまり人の目につきませんが、想像以上に多数の生物が棲んでいます。本書はこの土壌生物の顔ぶれ(多様性)、暮らしとその

働き(機能)について解説したものです。土壌生物は植物が光合成によって二酸化炭素と水、土壌養分から作った有機物を、逆に「分解」し、二酸化炭素を大気に戻し、養分を植物の根から再吸収できるようにしています。これは社会で言うリサイクルですが、自然のリサイクルは人類が現れる前からあり、地球環境を維持してきました。このバランスが崩れたのが石炭紀で、「分解」生物がやや弱く、樹木が石炭として堆積しました。現在は、人の活動によってまたバランスが崩れています。実は大気中の二酸化炭素上昇には化石燃料の使用と農業生産が同じくらい責任があり、早く土壌生物を保全する農業に転換しないと地球環境は危うい、ということが書いてあります。

(食農学類/金子信博)

カウンターの内側から

人間発達文化学類 4年 岩本 茜里

私がカウンター業務に携わって約1年半経ちますが、図書館というのは様々に利用されていることを強く実感しています。カウンター業務と言っても、カウンターでの対応だけでなく、返却された本を元の本棚の所定の位置に戻したり、館内の利用状況を確認したりもしています。そのような中で、耳をすましていると聞こえてくる音があります。例えば、個人スペースでは、手に取った本をめくる音やノートにペンを走らせる音です。スタディルームやセミナールーム、ラーニングcommonsといった少人数あるいは大勢でグループ学習のできるスペースでは、意見を交わす声やホワイトボードに書き入れたりそれを示したりする音。他にもパソコンを使えるスペースでは、キーボードをたたく音、マウスをクリックする音、プリンターで印刷する音。このように利用者やその利用目的等によって、聞こえてくる音は様々なのです。

図書館での学びに向かう空間において、さらに耳をすませば、本や人との対話によって、なるほどと納得する声や思考を巡らせる音までもが聞こえてきそうです。利用している方にとっては、本に書かれている言葉に、時にはリフレッシュ



のため、イヤフォンから流れる音楽に耳をすましているかもしれません。

問い合わせのためにカウンターにやって来る音もあります。様々なサービスについて気になることや利用して困ったこと等あれば、その声を是非カウンターへお届けください。

谷川俊太郎の『みみをすます』の詩には「みみをすます/きょうへとながれこむ/あしたの/まだきこえない/おがわのせせらぎに/みみをすます」とあります。図書館にあるたくさんの資料の中から、皆さんにとっての素敵な出会いが、きっと待っていることと思います。是非ご活用ください。

福島大学附属図書館報

書 燈

発行日/2019年(令和元年)9月

発行元/福島大学附属図書館
〒960-1293 福島県福島市金谷川1番地
tel.024-548-8087

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>



福島大学附属図書館報『書燈』第53号 目次

● 巻頭言「図書館と私」	生源寺真一	1
● 農山漁村文化協会(農文協)からの寄贈図書の受け入れについて	附属図書館	2
● 食農学類開設関連展示の報告	附属図書館	3
● 理念と目標の改訂について	鈴木めぐみ	4
● ブロンズ像『峰』について	新井 浩	5
● 今野源八郎旧蔵書について	阿部 公一	5
● 学内教員著作寄贈図書の紹介		
『〈男性同性愛者〉の社会史』	前川 直哉	6
『持続可能社会実現に向けたベトナムと日本の国際協力』	坂本 恵	6
『鐘の音が響くカフェで』	田村奈保子	6
『社会保障』	熊沢 透	7
『福島の除染と復興』	川崎 興太	7
『土壌生態学』	金子 信博	7
● カウンターの内側から	岩本 茜里	8

編集
後記

今回は、4月の食農学類開設に関連した記事を中心にお届けしました。この号には間に合いませんでしたが、9月11日には開学70周年事業の一環として、図書館1Fに常設の展示コーナーを設置し、オープニングセレモニーを開催しました。次号でお伝えしたいと思いますので、引き続きご愛読ください。(A)